

短期派遣 EUROPA 派遣報告書

堀口大樹

派遣先：ラトヴィア大学人文学部 ラトヴィア語学・バルト語学科
ラトヴィア語学・一般言語学コース 博士課程

派遣期間：2011年9月30日から2011年11月5日
2011年11月15日から2012年2月7日

研究テーマ：ラトヴィア語の動詞接頭辞付加

[派遣の概要]

派遣者は派遣先に秋学期の研修生として赴き、授業の聴講や指導教官の個別指導、学会発表、文献や言語資料の補充を行い、日本語で書いている博士論文の執筆や見直しを進めた。

・授業の聴講

当初は博士課程の授業の聴講を目的としていたが、授業の時間割は博士課程の秋学期が始まる10月初めの時点で発表されていなかった上、ラトヴィア語を専門としない他コースの大学院生も対象としており、派遣者の博士論文のテーマには直接関係のない授業もあった。また指導教員が派遣期間中の学期に博士課程の授業を担当しないことが現地でわかり、残念であった。

博士課程の学生は大半が大学で講師をしながら、博士論文の執筆も行っているため、講師の仕事をしたがらその合間に博士課程の授業も受けるという、日本とは異なるスタイルを垣間見ることができ、興味深かった。

博士課程の授業は選択肢もコマ数も少なかったため、修士課程と学部のラトヴィア語学の授業を聴講した。聴講したのは修士課程向けの「機能言語学」と「文体論」、学部生向けの「形態論」と「言語文化論」であった。「言語文化論」以外は指導教員の授業や他の講師と交代で行う授業であった。他民族に支配されてきたラトヴィア人のアイデンティティはラトヴィア語と強く結びついているが、言葉の規範からの逸脱を指摘し、言葉のエチケットを追求する「言語文化論」は、ラトヴィア語学のれっきとした学問分野になっている。

派遣者のラトヴィア語は独習のため、どのようにラトヴィア人学生が母語のラトヴィア語を大学で学んでいるのか、または研究しているのかを、間近に見ることができて興味深かった。また強く感じたのは、規範を重視し言語の変化や規範からの逸脱を認めにくい風潮や、伝統的な理論に懐疑的になれない風潮がややあることも感じた。

派遣者が博士論文で扱うのは動詞接頭辞付加でも、規範主義の立場からは認められないことが多い動詞接頭辞付加の分析である。その点で、あらかじめ博士論文の構想を日本で

練っておき、構成がほぼ出来上がった上で派遣へ赴いたのはタイミングが良かった。博士論文の構想が練りきらないまま派遣へ赴いていれば、博士論文の論旨は異なるものになっていたかもしれない。

・指導教官との個別指導

大学が試験期間に入った1月には、週1回の頻度で指導教員に時間を割いていただき、1回あたり1時間半から最長で3時間の個別指導をしていただいた。現在執筆中の博士論文は5つの章からなるが、2章から5章、そして最後に1章という順番で計5回の章ごとの個別指導を受けることができた。

派遣者は章の展開や理論、用例をラトヴィア語でレジюмеにし、特に意見を伺いたいところをマーカーで示して事前に指導教員にメールで送っておき、実際に会って意見を伺うという形式をとった。

ラトヴィア語でのレジюмеは用例も含め各回ともワードで10ページを超え、レジюме作成には時間がかかった。しかしまとめなおす作業自体は、ラトヴィア語力の向上はもちろんのこと、論旨の詰めの甘い箇所を見直し、尚且つ全体を一通り概観する上で役に立った。

個別指導では、指導教員が賛同する点やしない点を明示していただいたほか、博士論文の副題目の見直しも一緒にしていただいた。また論旨の展開の中でもっと強調すべきポイントや論文の意義など、自分では気づきにくい、または打ち出しにくい点でもアドバイスをしていただいた。

・学会発表

派遣中には2つの学会を発表した。

10月中旬には『第3回世界ラトヴィア人研究者大会兼第4回ラトヴィア学大会』のセッション「ラトヴィア語学における理論と方法論」に参加をした。発表題目は「国際的借用語の”民族化”の手段としての接頭辞」である。これは博士論文で扱うラトヴィア語の動詞接頭辞付加のテーマであり、規範的な言語使用を推進する「言語文化論」から批判されることの多い外国語起源の動詞への接頭辞付加を、動詞のアスペクトと話者の主観的評価、動詞接頭辞付加の表現性に絡めて論じた。

質疑応答では2つの質問が出された。リトアニア語の接尾辞の研究で派遣者と似た研究手法を取り入れているリトアニアの参加者から、ラトヴィア語の外国語起源の動詞に関する簡単な質問が提起された。またラトヴィア人の研究者からは、発表内容で示した数量データの背景の説明が求められた。後者の質問に関してはすでに分析をしていたため、筒がなく質問に答えることができた。またその数量データが母語話者の感覚と一致しているというコメントも同時に頂けたのがよかった。

12月初旬には学会『語とその研究の諸側面』に参加をした。発表題目は「発話における接頭辞動詞：言い直しと追加の観点から」である。話者が言葉や表現を言い直す際に、接

頭辞動詞が用いられている用例を分析した。題材はインターネット上で試聴、ダウンロードが可能な国営ラジオのトーク番組である。これまで約 150 回分の番組をすでに日本で試聴していたため、ラトヴィアではその用例の分析に集中した。

「言い直し」はどんな言語にも観察できるが、書かれた言語よりも話された言語に特有の現象である。「言い直し」の現象には発音や文法的な間違い、言いよどみなどがあるが、“単なる間違い”の一蹴りで済まされてしまいそうな現象を研究対象にすることは大きな賭けであった。

発表後の質疑応答では、「話者の思考プロセスが言い直しの現象に現れていて興味深い」という肯定的コメントをいただいた。現地の指導教官からは内容についての質問が出たが、日本語で執筆中の論文では分析結果を得ていたため、うまく答えられた。発表後は、音声言語を専門としている研究者に、方法論の点で意見を個別に乞うことができた。

・文献と言語資料の補充

文献はこれまでに訪ラトをした際にほぼ収集していたため、新たに博士論文で引用すべき文献はあまり多くなかった。

博士論文で言語資料として用いるトーク番組は生放送であるが、話者が言い間違いをしたり言葉に詰まる場面があることから、事前に準備されたテキストを読んでいないことは予想していた。それを確かめる意味で、ラジオ番組の収録を見学する機会を得た。スタジオでは実際に何かしらのテキストを読んでいるわけではなく、話者はほぼその場で考え発言をしていることや、スタジオ内の生放送の雰囲気や番組直前にどの程度話す内容の打ち合わせをしているのかなどを自分の目で確かめることができた。これにより、スタジオで見た事実に基づいて博士論文での言語資料のこのトーク番組を特徴づけることができる。

派遣期間中にはラトヴィア語を研究する外国人として 2 回のテレビ、1 回のラジオインタビューを受けた。自己紹介を通じて、どんなことを研究しているのかにも話させていただき、外国人研究者としての自覚が高まった。

博士論文の内容を充実させることが全体の目的であったが、それと同様に大きな収穫は、授業の聴講や個別指導、学会発表を通じて、母語話者や母語話者の研究者が気づいていない視点を外国人なりに提案していくことができるかもしれない、と思い始めることができたことである。この派遣を糧に、今後も研究に精進できればと思う。

[今後の課題]

派遣中に得た指導教員や本学指導教官のアドバイスを考慮に入れた博士論文の見直しを行っており、今年 6 月の博士論文の提出を目指している。また、博士論文の一部にもなっており、派遣期間中に行った学会発表のテーマに関する原稿 2 本を 4 月と 5 月に完成させる予定である。